伝統文法と生成文法の接点

「伝統文法と生成文法の接点」総括

田窪行則

キーワード：ワークショップ趣旨説明、原理と変数アプローチ、橋本文法、時枝文法、制約に基づく文法

要　旨

本ワークショップは、生成文法の枠組みで研究している研究者とそれ以外の国語学、日本語学の伝統で研究している研究者の間の相互意志疎通をはかる目的で企画された。生成文法の研究者が伝統的な国語学、日本語学の問題をどのように解決しているか、又、国語学、日本語学から生成文法にどのような貢献が可能であるかが、議論された。

80年代にはいって、チョムスキーの生成文法は、「原理と変数によるアプローチ」により、一種のパラダイム変化とでもいえる変貌をとげている。これまでの構文や個別言語に特殊化した規則による現象記述から、変数値をあたえられた普遍的な原理とその変数値の固定による個別文法の決定という考えにより、子どもの言語習得を説明する理論となった。このアプローチにより、これまで日本語、英語といった個別言語に特有と考えられていた諸規則や制約は、そのほとんどが普遍的な原理とその変数的あらわれの組み合わせとしてとらえられるようになっている。これはある意味では刺激的なことであり、これまでの、英語や他の西欧語中心の研究から、アジアの言語、日本語の研究から言語理論自体の構成に貢献する研究が可能となり、これまで明らかになっている類型論的事実が原理的に説明できる展望が開ける。チョムスキーの当初の目標であった言語習得の説明、説明的理論の構成による「心・脳の計算理論としての生成文法」の理念が次第に具体化しつつある段階ととらえられている。

さらに、おなじ80年代から、イギリスやアメリカ西海岸を中心として、変形を使わない生成文法が現れ、おもに、自然言語処理を研究する研究者に用いられて、広範囲の言語事実の記述に使われている。これは、非常に記述能力が高く、多くの言語現象を明示的に記述するのに用いられている。

実際には、他にも生成文法と位置づけられる理論は数多くあるが、結果的に、本ワークショップに採用された論文は、これら二つの立場に立つ生成文法学者が、国語学・日本語学の伝統的問題にどのように答えようとしているかを示すものとなった。はじめの二つは、変形を用いない文法理論の枠組みからの研究、あとの二つは「原理と変数アプローチ」に

基づく研究である。

郡司論文は、多分に全体の導入的な役目を担うものである。生成文法という営みがどのようなものであり、それが科学理論としてどのように位置づけられるのかを、おもに、変形を用いない制約に基づく文法理論を中心に入門的な視点から語っている。

吉本論文は、郡司論文とほぼ同じ理論に基づくものであるが、より細かい議論を展開している。吉本論文は、国語学の伝統的問題であり、かつ、生成文法における問題でもあった橋本的連文節構造と時枝的入れ子構造を止揚する理論を提示している。従来、前者は音形を反映した構造であり、後者は意味を反映した構造であるとされてきた。伝統的生成文法では、表層構造と深層構造に対応させてその関係をしめしたり、最近の語形成にかんする論文では、時枝的な入れ子構造を基底構造とし、これに主辞編入といった操作をかけることで、橋本的構造を生成するという操作をしている。吉本論文は、このような操作なしで、この問題に解決を与えようという試みである。

この論文は、郡司論文で解説されている「「制約」と「変形」」という二つのアプローチの具体的な差異を見せてくれる。移動や主辞編入といった操作は、情報の流れに方向性を与える。基本的な構造に移動、主辞編入という操作をかけるということは、方向性のある情報の流れ(＝派生)を想定していることになる。例えば、「字を書きながら」という句が、[[字を書き]ながら]という意味的な係り受けをよりよく反映する時枝的な入れ子構造を基本として、これに主辞編入をかけて[[字を][書きながら]]という音声的な面を反映する橋本的な構造になるとすると、時枝構造から橋本構造へという方向性のある派生が想定される。しかし、これらの構造に方向性のある派生関係を想定するアプリオリーな理由はないわけで、二つの構造がなんらかの形で関係づけられればよいという立場も可能である。吉本論文はこの二つの構造に派生関係を認めず、単なる情報の受け渡しのみを想定するという方法を採用している。このどちらが正しいかはかなり微妙な問題で、単に表記上の差であり、経験的な(empirical)差はない可能性もある。

久保論文は、状態動詞と動作動詞の振舞いの区別を「原理と変数のアプローチ」から見たものである。両者は、時制の解釈、テ形との共起可能性、目的格の表示の仕方といった現象について違いをみせる。従来、前二者は状態動詞の意味の問題、最後は統語的な問題として扱われ、三者は、互いに偶然的かつ独立した現象としてとらえられてきた。久保論文は、これらをいくつかの普遍文法的前提と、状態動詞を時制を表す機能範疇に編入するという移動操作を仮定することにより、純統語的に説明しようとする試みである。実は、この議論は、状態動詞を一種のモダリティを含む要素として分析するというある種の国語学的・日本語学的分析と親和性を持つといえなくもない。これまでの議論が、状態性と格支配、その他との関係を単に記述的に述べるにとどまり、統一的に説明を与えてこなかったのに対し、普遍原理と統語操作によりこれらに統一的な説明を与えようとする試みとして注目される。

金水論文は、国語学者による生成文法の実践である。必ずしも生成文法の専門家ではない氏が、自分の抱える国語学的な問題を解決する手段、装置として生成文法をどのように

使うか、それに対してどのような態度をとるのが、最も生産的かを示している。具体的には、原理と変数による最新のアプローチを現代語や古代語の状態性用言の分析に応用したものである。久保論文とほぼ同じ現象を対象として、ほぼ同じ立場の分析であるが、前提の違いにより、様々な差異が生じている点に注目したい。

報告者には、できるだけ新規な用語は解説を、共有されていない前提には根拠を示すようお願いしてあるが、どの論文も残念ながら細部の理解のためにはかなりの予備知識を必要とし、用語法、論理の展開に非明示的な前提知識を要求する。そのためシンポジウムの席上でもかなりの用語上の誤解が生じた。しかし、答えようとしている問題、課題は非常に明快なものであり、その点で論旨、議論そのものの理解はそれほど難しくはないであろう。

用語の新奇さ、複雑さにまどわされて、その主張自体の本質を見逃さないでいただきたい。どのような現象を、どのような方向で説明、解決しようとしているのかさえとらえれば、これらの困難はそれほど大きな理解への障害とはならないはずである。これらの論文は、非常に伝統的な問題に、真摯に答えようとする試みであり、その具体的な分析自体には異論があっても、問題自体はどの研究者も共有できるものであると信じられる。

最後に国語学と生成文法の接点について筆者個人の立場から一言つけ加えたい。

国語学の伝統と生成文法とはいくつもの関わり方がある。例えば、生成文法を現象の明示的な記述のための装置として使うこともあるであろう。時枝の入れ子構造にしても橋本の連文節構造にしてもそうであるが、明示的な記述、分析装置を与えられ、その主張が明確になれば文の構造分析は飛躍的に進歩する。吉本氏の用いたタイプ付きユニフィケーション文法などはこの好例で、行っている分析自体は、多少の違和感を除いてしまえば、伝統的国語学となんら変わるものはない。ユニフィケーション文法は、簡単に談話レベルの現象にも拡張できるから、ますます利用価値は上がるであろう。

説明の対象となる現象レベルでの接点も非常に多い。これまで、国語学、日本語学の歴史の中で現れたさまざまな文法研究は、多くの言語事実を掘り起こしてきた。それらの事実は、充分に明示的に述べられている限り、どのような言語研究者も対象にしなければならないものである。また、これらの事実間にある種の相関があれば、その相関は、どの研究者も記述、説明をしなければならないものであろう。また、生成文法において明らかにされてきた言語事実もどの立場の研究であれ、考察の対象となる可能性がある。

「原理と変数アプローチ」では、普遍文法に寄与しない現象は意味がない。その点で、現象すべてを網羅的に記述しようとする、記述文法的な試みとは対極に位置するものと見ることもできる。しかし、実際には、どのような現象が、普遍文法の解明に関与して来るかは、前もって決まっているわけではない。これまで、生成文法の射程に入ってなかった現象でも、理論の精密化とともに枠組みのなかに入ってくる可能性がでて来る。例えば、生成文法では、いま、歴史変化に対する一般的な法則を幼児の言語獲得と絡めて解明しようとする試みがあり、それにともなって方言間の差異、歴史変化等の資料をも一般言語学的な原理・原則の発見と実証に使うようになってきている。このような動きから、文献的な

国語学からのあらたな貢献が期待されることも有り得る。この際には、文献学的な国語学の成果を生成文法学者が利用可能な形にする作業が必要になる。さらに、その結果を文献学的に確かめる作業も生じて来るであろう。

現在、この様な交流は多少困難である。それは、文献学的な知識や能力を持っているもの以外には、これらの情報が利用可能な形では存在しないからであり、そのため、生成文法に詳しく、かつ文献学的訓練を受けた極少数の国語学者のみが研究を行っている状態である。この点で生成文法学者の怠慢を非難することは簡単だが、これは、例えば、近年、英語の文献資料を用いた生成文法研究が非常に盛んになっていることを考えると不幸なことといわざるを得ない。

普遍的な枠組みでの文献資料の利用可能性を高める作業が必要である。生成文法は現代語日本語研究とより緊密な関係を持っていると考えられがちであろうが、内観で資料が簡単に得られる現代日本語より、文献国語学の方が、生成文法との緊密な接点を持つことによって豊かな結果を得られるという可能性もあるのである。あらゆる可能性に目を閉ざさないで研究を進めて行きたい。

——九州大学助教授——